

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | | |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

氏 名 楊 竹楠

論文題目 分裂構文に関する日中対照研究
—構文文法のアプローチから—

論文審査担当者

主 査 名古屋大学 教授 堀江 薫

委 員 名古屋大学 教授 杉村 泰

委 員 名古屋大学 准教授 奥田 智樹

本研究は、認知言語学における「構文文法 (Construction Grammar)」という研究アプローチの分析枠組みに基づいて、中国語の“...的是...”と“...是...的”両分裂構文を日本語の「...のは...だ」分裂構文と対照しながら、日中両言語の分裂構文の機能領域、同一の使用場面における構文の選択傾向、他構文と共に起る場合の構文的拡張を考察したものである。本研究の新規性は、これまで部分的な対照しか行われてこなかった両言語の分裂構文に対して、特に中国語側でこれまで分裂構文の研究で扱われてこなかった関連構文を取り上げ、構文文法の観点を導入し、言語類型論や語用論も援用することにより、中国語の分裂構文と関連する諸構文の間のネットワーク関係を詳細に明らかにした点にある。

以下、本論文の概要と評価の結果を報告する。

[本論文の概要]

第1章では、世界の諸言語における焦点化の研究を出発点とし、情報構造をコード化する一つの手段として、英語、日本語、中国語に共通して存在する構文形式としての分裂構文の定義を示した。

第2章では、分裂構文の研究が生産的に行われている英語の研究成果に基づき、統語的観点、語用論的観点、認知的観点という三つの観点から、分裂構文を考察した先行研究を概観した。また、中国語では構文文法の観点からの研究がまだ少ない現状を確認した。特に、中国語と他言語の分裂構文の対照研究においても特定の言語理論に基づいて体系的に分析が行われたものは多くないことがわかった。中国語の分裂構文は、“...是...的”構文が一般的に構文として扱われているが、もう一つのタイプである“...的是...”構文に関する研究が少ないため“...是...的”と“...的是...”の両構文が相互にどのような関係を持っているかが明らかになっていない。このため、本研究では、認知言語学の構文文法のアプローチに基づいて中国語の分裂構文を“...的是...”構文と“...是...的”構文の二形式に分類した上で、日本語の「...のは...だ」分裂構文と対照しながら考察を行うことにした。

第3章では、本研究が援用する理論である構文文法の枠組みを紹介した。本研究では、構文を「意味と形式の結合体」として捉え、構文と構文間の関係、その構文が持つ特性を動機づける継承関係によって構築された構文の間のネットワークという構文文法の観点を援用し、言語類型論と語用論の分析手法を補完的に用いた。

第4章から第6章までは、コーパスから具体例を通して、日中両言語における分裂構文の対照を行った。具体的には、分裂構文の機能領域、談話機能の観点から見る分裂構文の選択の差異、分裂構文における構文的拡張という三つの面から分析・考察した。

まず第4章では、中国語の“...的是...”分裂構文と“...是...的”分裂構文を、日本語の「...のは...だ」分裂構文と対照し、三つの構文のスキーマを考察した。具体的には、中日対訳コーパスから抽出した例から、“...的是...”分裂構文と「...のは...だ」分裂構文、“...是...的”分裂構文と「...のは...だ」分裂構文の対応関係を考察し、焦点化要素の相違を見出した。さらに、中国語の“...的是...”構文と日本語の「...のは...だ」構文は構造的に類似しているものの、時間や場所的要素の焦点化、理由節の焦点化、行為（事象）全体の焦点化という三つの場合、それぞれ中国語の“...的是...”構文における名詞化辞“的”に機能上の制限が見られることを明らかにした。その結果中国語の両分裂構文は機能領域が異なり、相互に役割を分担する関係となっていることが分かった他、日本語の「ノダ」

構文との対照を通じて、“…是…的”構文は「モノ」の焦点化から「コト」の焦点化への連続性が見られることが明らかになった。

第5章では、同じ談話場面における分裂構文の選好性について検討した。具体的には対訳コーパスの用例を調べ、日中両言語における分裂構文の選好傾向の考察を通じて、当該構文が両言語とも文法的に成立する場合、使用頻度および焦点化の要素によって相違が生じることを確認した。この相違が生じた要因を談話機能の観点から考察した結果、日中両言語の分裂構文における主題展開機能の相違と、間主観性の特徴という二つの要因によって、分裂構文を選択するか否かが決められることが分かった。

第6章では、分裂構文と他構文が共起して生まれた拡張的構文である“有的是”構文、および“不是…是…”構文(“Not X But Y”構文)と共起した“…的的不是…是”構文の二つを、日本語の同様の構造を持つ構文と対照を行った。その結果、それぞれの構文において両言語に共通するプロトタイプの意味が見られる一方、拡張的意味は中国語にしか生じないことが分かった。

最後に第7章では本研究の総括を行い、認知言語学、中国語学、第二言語教育への示唆を述べた。

【本論文の評価】

本論文の最大の意義は、中国語と日本語の文法の対照研究という多くの研究蓄積のある分野において。これまで日本語の分裂構文「・・・のは・・・だ」構文と比較されてきた中国語の“…是…的”構文以外に、“…的的是…”構文も分析対象にすることを提案し、さらに、構文間の機能的相違と関連性を構文文法という認知言語学理論を援用して明らかにした点にある。また、単に理論的枠組みの応用研究というにとどまらず、言語類型論や語用論の観点も取り入れることで多角的に研究対象に接近しており、内省へ依拠する従来の研究とは異なり、コーパスデータを積極的に収集して分析結果に客観性を持たせようとしている点も高く評価できる。さらに、まだ完全に定着していない新奇構文も研究対象として取り上げる進取性も評価に値する。

審査員の総評においては、分裂構文の構文的取扱い、構文相互のネットワーク的な関係の分析を中心とする論の進め方や文章構成が全体として着実で説得力があるという意見を頂いた。一方で改善点として、様々な理論的概念や用語を援用しているが、読者に理解しやすいように導入する工夫が求められる箇所がいくつか指摘された。質疑応答に対して発表者は適格に答えており、博士論文の内容を深く把握していることが伺えた。

改善すべき点はあるものの、本論文は全体的にまとまりのある、完成度の高い論文であると評価できる。以上の評価から、審査員は全員一致して、本論文が博士学位に相応しい内容と水準を備えていると判断した。